古田武彦講演会　二〇〇三年　三月十六日（日）午後二時より四時　於：大阪府八尾市高安　いずみ苑

弥生の土笛と出雲王朝

わたくしの講演の前に、まず笛を聴かせていただきたいということなので、最初に弥生の土笛を吹かせていただきます。

（演奏）ドレミファソラシド

ありがとうございました。

一、出雲暦は王朝のしるし

まず今日のお話の始まりに、一月から十二月まで、大和言葉として表現できますが、ご存じでしょうか。

一月睦月（むつき）
二月如月（きさらぎ）
三月弥生（やよい）
四月卯月（うづき）
五月皐月（さつき）
六月水無月（みなづき）
七月文月（ふづき）
八月葉月（はづき）
九月長月（ながつき）
十月神無月（かんなづき）
十一月霜月（しもつき）
十二月師走（しわす）

これは、おそらく古代から伝えられていた月の名であろうと思うのですが、これを正確に分析すれば日本の古代史の深い全貌が、わたしがいま分っているところより、もっと深いところが分かるのではないか。そのような直感を持っているのですが、皆さんがまた追求していただければ幸いです。

それはそうと致しまして、なぜ、本日このような話を持ち出しましたかというと、この中で十月が神無月です。太陽暦に換算すれば、現在の十一月にあたるようです。

なぜ神無月かと言いますと、出雲に神様が集まるからと言われている。出雲に神様が集まる月である。各地に神様がいなくなるから「神無月」である。そのように言われている。

これも一言、余計なことを言いますが、この「神無月」の解釈は本当であろうか。つまり漢字を見れば、「ナ」に「無」をあてていますから、そのように言われていますが、本当に「ナ」は「なし」という意味であろうか。余計な理屈を言えば、それでは十一月には「出雲は神様だらけ」ではないか。

そのように、この解釈はほんらいの解釈ではなく、後から付加した解釈。そのような気がします。もっとほんらいの「神無（カンナ）月」の意味は、違うのではなかろうか。そういう疑問を持ってはいます。その疑問は疑問として、結論は神々が出雲に集まる月である。そういうことには疑いがない。

それで出雲の神様に関心がある方がお調べ願えればよいのですが、出雲に神様が集まると言われている地域は、日本列島のどこなのか。わたしの印象では全国ではない。西日本が中心だ。そのような印象を持っています。九州の神社ですが、うちの神様は神無月に出雲に行かれない神様。そのような伝承を持っている神社もある。なぜ行かないか。そこまで説明がないのですが、その土地では格式が非常に高い有力な神社です。おそらく出雲に対して威張っている神様。そのような神様もある。ですから、みなさん頑張って調べて貰えばよい。神社名鑑に、電話番号が載っているようですから、「あなたの神社では、出雲に神様が行かれますか。」と聞いていただければよい。

とにかく日本列島の西日本を中心とした広い領域。日本列島の三分の二ぐらいの偏りをもった広い領域。関東の皆さんも、知識としてみなさん聞いていると言われます。

さて問題は、これは変な話です。なぜ変な話かと言いますと、簡単に言えば神様の参勤交代。神様は自分の居るところで、ずっと威張っているわけにはいかない。一年に一回は出雲の神様に、お伺い(うかが)を立てに行かなければならない。これをサボると神様の面子を失墜するのではないか。そのような仕組みになっています。

これもわたしは、この話をしようと思って、おそまきながら気がついたのですが、江戸幕府は参勤交代を始めました。これは何をヒントに考えついたのか。鎌倉時代に源頼朝が、参勤交代を始めたという話は聞かない。平家の平清盛が、参勤交代を始めたという話は聞かない。なぜか江戸時代に新しく参勤交代を始めた。これは何をヒントに参勤交代を始めたのか。わたしは、江戸時代初期の研究を行ったことはないので知らないが、もしかしたらこの出雲の神無月の話をヒントにしたのではないか。そう思っているところです。まさか逆ではないですよ。出雲のほうがヒントを得て、江戸時代に話を作った。そのような話は、まず無理です。出雲のほうが古いですから。無関係か、関係があるとすれば矢印は出雲から江戸時代です。逆ではないであろう。

それはともかく、この神無月の話は、出雲を中心とした神々の中央封建体制というか、神々の中の支配・被支配の関係、少なくとも中央と地方の関係が表現されていることは、まず疑いがない。

先ほど大和言葉・大和暦と申しましたが、より正確には出雲言葉。つまりこの暦は出雲暦。一月、二月と申しましたが、これは漢数字であり、中国でも日本でも使う言葉ですが、それでない日本ほんらいの言葉で表現しようと思えば、出雲暦になってしまう。これは非常に意味がある言葉です。そこには出雲を中心とし、参勤交代めいた神様の尊卑、神々の上下関係が表現されていることは、まず間違いがない。

今お話したこの二つの問題をとっても、出雲王朝という概念はまず必然ではないだろうか。この出雲王朝という概念、歴史学者はそっぽを向いて、知らない振りをしています。ですが知らないふりをするほうが無理であって、出雲王朝という概念・仮説をたてて理解するほうが、よほどナチュラルではないか。そのことは、いま聞いた話だけでも、かなり御理解いただけるのではないか。

出雲王朝の話は、たくさんあります。今日持ってきました資料がありますので、配布して下さい。わたし自身が、びっくりするような結論に達しました。手短にまず答えだけ言っておきます。出雲王朝の淵源はウラジオストックにある。驚くようなお話しですが、矢印はウラジオストックから出雲に来た。論理的にそこに突き動かされてきました。もう一言申しますと、それは靺鞨(まつかつ)人が、北から出雲

に来た。有名な国引き神話は、それを表現している。そういう事実にぶつかりました。この問題は時間の関係で、配布されたものをお読みいただければお分かりになると思います。それで出雲王朝そのものに戻って話を始めさせていただきます。

（『古代に真実を求めて』第七集　明石書店　講演記録記載）

二、大国主とわたし

つぎは初めて、わたしが古代史をやり始めて間もない頃です。三十年ほど前ですが、島根県へ行きました。島根県は、ご存じのように東三分の二ぐらいが出雲で、西の三分の一が石見の国です。その石見の国でも出雲よりのところに大国村がありました。（訪問当時は、仁摩町）わたしは、ここが目見当ですが、大国主となにか関わりがあるのではないか。大国主というのは、字面どおり「大国」という場所の主人と名乗っています。島根県を調べましても、他に「大国」というところはありません。周りを調べましても、ここにしか「大国」というところはありませんから、大国村が大国主の 名前と関わりがあるのではないか。そのように想像しました。想像そのものはいくらでも出来ますが、やはり現地に行ってみなければならない。

これは、わたしが尊敬する学者で秋田孝季という江戸時代寛政年間の人ですが、その人が言った言葉がある。「歴史は足にて知るべきものなり。」、これは注釈は要りません。名言です。彼自身、日本列島を歩き回り、海外まで調べ回った人です。

元にもどり、やはり現地に行ってみなければならない。そのように考えて妻と一緒に大国村へ行きました。そこには旅館が一軒しかなかった。その村の旧家の方が、旅館というか、人を泊める生業を営んでおられた。すばらしい建物の家でした。そこで夕食の時、お聞きしました。

「この土地の古い謂れを、ご存じの方をご紹介いただけないでしょうか。」とお聞きしました。そうすると御主人の奥さんが「おばあさんが良く知っております。」と言われましたので、お願いいたしました。品の良いおばあさんが、階段から下りてこられました。

わたしが、「大国主命について、お話が何か残っていないでしょうか。」と、お聞きしました。そうすると「その方はわたしの家でお泊めした方でございます。」と、おばあさんが答えられました。わたしは、本当にそうか、訝りました。

その人がさらに言われたのは、「その方は賊に追われて逃げてこられ、私の家でお匿い申したことがございます。」と答えられ、いよいよ、これは大丈夫なのかな、勘が狂ったのではないかと思いました。

それで、さらにこの村の郷土史に詳しい方をご紹介いただいて、お会いしました。しっかりした感じのおじいさんが居られました。わたしは、さらに大国主命についてご存じのことはありませんかと、同じことをお聞きしました。

ですが、その方の言われることには、「あの方には、私どもはたいへん迷惑致しました。あの方は、たいへん女好きな方です。あちこちの女を、自分のものにしては、それを拠点にして勢力を広げる。そういうことを繰り返し、繰り返し行った、たいへんお上手な方です。われわれ村の者は、たいへん迷惑いたしました。」

と言われました。これで二人の方に同じようなことを、お聞きし

ました。

また近くの洞穴に案内していただき、そこに大国主命が住んで居られたと言われました。わたしも行って入り口の写真を取りました。洞穴には、マムシが出るというので入りませんでしたが。

さらに私が「大国主は、この村の方ですか」と尋ねると、「いえ、いえ！この村の方では決してございません。よそから、お見えになった方でございます。」と答えられ、とんでもないことを言う、そのような応答だった。再度、「よそと言われるが、どこですか。」と尋ねると、「それは、どこから来られたか分かりませんが、村の方では決してございません。」と、そこだけ念を押す奇妙な問答をかわした。

今お話ししたのは、聞き取った話の、エキスの部分です。それでわたしが感じとったのは、どうもこの村の人にとっては、大国主は非常にリアルな存在である。しかもお聞きのように、たいへん誇りにするというよりも、たいへん迷惑至極な存在としてとらえられている。そういうイメージである。どうもそのような人物だった。

聞いていて、まるで戦国時代やり手だった若い頃の秀吉の話を思い浮かべながら、大国主の話を聞いていた。明治は遠くなりにけり。それはとんでもない話だ。弥生はいまだに生きている。その村の人にとっては、弥生はまだ近いのです。

わたしはその時までは、大国主命は架空の人物であると思い込んでいた。本日昼の食事の雑談で小学生の時、おおきな袋をかついで因幡の白兎を学芸会で演じたという人がいましたが、わたしもやりました。ですが大国主命は、実在の人物である。童話のあの話は、架空の話である、架空の人物である、そう思っていたのは、おおきな間違いだった。そのような結論を得たのが、大国訪問の、おおきな成果でございます。

三、「国譲り」神話

次の話に移ります。

壱岐・対馬のお話をいたします。対馬の北側北島に、浅茅湾（あそう）という入り込んだ湾がありまして、その小船越に阿麻氐留（アマテル）神社があります。わたしは、ここがかの有名な伊勢神宮に祭られている天照大神（アマテラスオオミカミ）の原産地である。そのように考えています。

その証明を簡単に言いますと、「天降（あまくだ）る」という言葉があります。その天降っている場所が、三箇所あります。筑紫に天降っています。出雲に天降っています。新羅に天降っています。その三種類しか到着地がない。しかも、いずれも、そこへ行く途中経過地がない。ということは、天高原、天国と言われるところは筑紫と出雲と新羅に囲まれた内側にあると考えなければならない。これが第一の論証です。

第二番目の論証は、『古事記』の中の国生み神話。その「大八島」の中で、「亦之名」という形の古い名前の島々がある。その中で「天の・・・」と書かれている島々がある。その島々を、地図上に置いてみますと、ほとんど対馬海流上の島々である。例外は一つだけ、大分県国東半島の先にある姫島が「天一根（あめひとつね）」と書いてある。それ以外はぜんぶ対馬海流上にある島です。もちろん「天（アマ）」という字を当てているのは、「海士（アマ）」に美しい字を当てているだけです。

美しい字を当てるということは、良くあることです。いちばん簡単な例をあげれば、わたしがいま住んでいる京都の向日（むこう）市。知らない人は、「向日（むかいひ）」と読みます。しかし、これは京都の桂川から見て、川向こうにあるから向日町（むこうまち）。呼び名と

しては、そういう形で成立した。それを漢字にするとき、音が似ていてきれいな字、佳字として「向日（むこう）」を当てただけです。例としては一つだけですが、そのような例はたくさんあります。

同じく、「天」と書いて海士（あま）。いまでも、海に潜る女の方を、海女（あま）さんと言いますが、女性に限らず海で生活する人を海士（あま）。だから海を支配する人が天族です。それに天原、壱岐の北端部のところの海水浴場に天の原があります。

元に戻り、「天降（あまくだ）る。」と動詞の用法から見ても、『古事記』の「亦之名・・・」という古名から見ても、同じ結論を示している。要するに対馬海流上の島々が「天国（あまくに）」である。その天国の中の対馬に、阿麻氐留（アマテル）神社が延喜式にあります。

それで「天照大神」を「アマテルオオカミ」・「テンテルダイジン」と子供が読んで、憤慨している大人がいますが、あれは憤慨される子供がかわいそうだ。教えてもらわなければ「アマテラスオオミカミ」とは読めません。どう読むかと言えば「アマテル」。これなら子供も読めます。それに尊称・敬語がいっぱい付いたものを、われわれは覚えさせられている。ですから出世魚ならぬ出世神としての姿を示しています。それの原形は天照大神（アマテルオオカミ）。いっぱい敬語が付いた言葉を覚えさせられているが、本来はアマテル。

そうしますと、対馬の阿麻氐留（あまてる）神社。そこへ行きました。宮司さんは居られなかったが氏子代表の一生漁師である小田豊さんにお会いし、お話をお聞きしました。そこでは小田さんに「天照大神について、そちらの神様についてお聞きになっていることはありますか。」とお尋ねしました。

「私どもの神様は、一番偉い神様です。だから神無月になると、出雲に行かれるのに一番最後に行かれます。なぜかと言いますと待たずに済みます。早く行った神様は、式が始まるまで待たねばならない。わたしどもの神様は偉いから最後に到着します。わたしどもの神様が着けば、すぐに式が始まります。そして式が終われば、わたしどもの神様は待たずにすぐ船に乗って帰って来られます。他の神様は、帰る順番を待って帰って行きます。一番偉い神様と聞いております。」

そのようなことを、ゆっくりとした漁民らしい口調で小田豊さんは話されました。しかもその季節、神無月は、出雲へ行くのも帰るのも、十一月が一番良い季節だそうです。行きは東向きですから対馬海流に乗ればよい。帰りは逆流ですから、風の向きが東から西へ吹いていなければ帰れない。これは御本人は、一生漁師ですから風の向きは良くご存じです。

それでわたしは、風習というのは自然の条件に合ったものが出来るとか、それにしても、この神様は不便な神様だ。人間と同じように船を待っている。この神様は、空をすいすい飛ぶわけには行かない神様である。いろいろ思いながら帰ってきた。

帰るのは、対馬から福岡空港まで飛行機で三十分かかります。その間に大事件が起こった。今、小田豊さんから聞いてきた話を反芻（はんすう）していると、とんでもないことを考えた。何んだ！　天照大神は家来ではないか。

小田さんは、「一番偉い神様だ。」ということを連発しています。しかしそれは、先ほどの参勤交代の話でお分かりのように、一番偉いのは出雲の神様ではないか。動かなくともよい。天照大神は、参勤交代よろしく、ご家来衆の中では一番偉い。小田さんは、そうは言わなかったが、見方を変えれば、そのように言える。しかしわたしの頭の中では、天照大神（アマテラスオオミカミ）と言えば、ゴッド・オブ・ゴッド(God of God)、神々の中の一番偉い神様と、戦争中から、そう教えられて思い込んでいた。天照大神が家来であるとい

うのは、わたしの頭の中で、ぶつかる大問題です。受け入れがたいから大ショックだった。ですがどう考えてみても、天照大神（アマテルオオカミ）は出雲の一の家来です。

第一こんな話、ウソ話として作れますか。天照大神（アマテラスオオミカミ）が伊勢神宮（内宮）の主神として祭られ、最高の神として讃えられている中で、それにまったく逆らうようなウソ話を作って伝える。そんなことが出来るでしょうか。そんな雰囲気があるようには思えない。小田さんは、お爺さんから聞いたと言われました。

ですが考えてみましたら、小田さんの言われるとおりです。なぜなら『古事記』の「国譲り神話」も、天照大神が使いを遣して、出雲の大国主に国を譲れと言った。そうしますと大国主は自分はもう引退しているから子供の事代主に話をしてくれと言われた。そして事代主のところへ行って、国を譲ってもらって成功するという話になる。あれも変な話で、もし以前から天照大神が御主人であれば、家来の大国主に何も国を譲れという必要がない。国を譲れという馬鹿はいない。取り上げればよい。ですから「国譲り」ということは、以前の主権者は大国主。一の家来が天照大神。それは結局反逆。簒奪を迫って成功した。それを美しく「国譲り」と言った。今の日本で、「敗戦」を「終戦」と美しく（？）言い換えた。はっきり言えば敗戦です。それと同じことで、強奪、簒奪したことを、国を譲ってもらったと、美しく『古事記』『日本書紀』は表現している。

それでは、なぜ縄文時代に出雲が栄えていたのか。その理由はハッキリしています。出雲の隠岐島の黒曜石。出雲の対岸、日本海側の二つの島。その島の中で、おむすびの形をした大きいほうの空港のある西郷町。そこは黒曜石の島です。、出るところによりデザインが違い見事な形をした黒曜石がたくさん出る。それが元で出雲が縄文時代に中心的な位置を勝ち得た。これは非常に分かりやすい。

それに対して弥生になり、中国から（日本列島に）金属器のノウハウがはいってきた。正確に言うとトルコ・ヒッタイトから金属器のノウハウが入ってきた。トルコは銅、ヒッタイトは鉄です。大氷原を通って中国に入り、そこに中国の文明が成立し、朝鮮半島を経て日本列島に来た。日本列島に最初に入ってきたのが壱岐・対馬です。その対馬・壱岐で海神族を牛耳っていたのが天照大神たちです。縄文以来の伝統で女性がまだ主導権を握っていた。縄文は女性が中心です。そこへ金属器の武器が入ってきた。金属器の武器と黒曜石を比べると比較にならない。圧倒的に金属器が有利だ。その金属器を握って、しかも当時船という最速の運搬手段・商売道具を握っていた。それをミックスして当時最強の軍団になり、黒曜石の出雲の大国主に対して一の家来である天照が反乱を起こした。わたしは、別に天照に対して、恨みもつらみもない。そういうイデオロギーもまったく無関係。ただ事実をあるがままに見るならば、わたしは「国譲り」を「天照の反乱」として表現した。それは成功した。そのことを表している。

同じく事代主に対しても、伝承がある。出雲の東の端が美保関（みほがせき）。そこで見た祭にびっくりした。青柴垣（あおふしがき）神事。四月の初めにある。さんざん待たされましたが、そのあげくに、両脇を抱えられて宮司さんがよろよろと出てきました。一週間ぐらい断食したのではないかと言うぐらい本当にやせ衰えて出てきました。海岸まで行き、用意されていた船に乗りました。その時、渡す縦板があって、その板の名前を聞いて驚いた。「天の浮橋」でございます。「天」は海士です。われわれは橋というと固定したものと思い込んでいますが、ここでは外せるから「浮橋」。われわれ

は「天の浮橋」というと、天上にかかる壮大な橋をイメージして、それをまた喜んでいましたが、あれは実は汚らしい板だった。漁師さんたちが今も使っている日常用語だった。祭は「天の浮橋」を渡って船に乗り込んで行き、船が出て行って、そこで終わる。待たされるだけ待たされまして、あっけなくそこで終わった。中での神事はいろいろあるのでしょうが。

これは何かというと、よろよろと出てきたのは事代主。神社の大きな看板に書いてありますが、天照の軍勢と戦い破れて、本土決戦というか最後の場面。その時事代主は、いろいろ戦いはあったが、もう戦いはやめよう。その代りわたし一人が犠牲になって死のう。わたし一人が死ぬ代りに出雲の人々を傷つけないことを、天照たちに約束して欲しい。そしてそう言って海の中に入っていってお隠れになった。そう言われれば『古事記』『日本書紀』にもそんな感じで書いてあるけれども、よく分からなかった。海の中へ入って行ったということは自殺したという事です。海の中へ入って行き自殺したということは、『古事記』『日本書紀』では書いていないけれども、土地の人々は永々と伝えていて、われわれを護るために海の中へ入ってお隠れになった。

実は恥を言いますが、わたしは一人で美保神社に何回も来ています。ですが看板はあまり見ない。どうせ看板には建前しか書かれていないと看板は読まずに中に入っていた。ところが五十人ばかりのツアーに講師として参加させていただきました。その時神社の境内で、ツアーの参加者の方から古田さん質問して良いですかと言われ、この看板には事代主は自殺したようなことに見えるのですが本当ですか。そういう質問を受けました。それでわたしは看板を真面目に見ましたが、確かにそのように書かれています。それまでわたしは、神社の案内をそれほど真面目に読んだことはなかった。歴史の資料にもならない話や単なる天皇家とのつながりを誇示する自慢話か、ウソじゃないけれども体裁ぶって書いてある。そのように思っていた。

ですが看板に書いてある青柴垣（あおふしがき）神事。われわれに代って事代主がお隠れになった。これは毎年、この行事を行っています。この天照の反乱＝国譲りの事件は、弥生の前期末・中期初めですから、以前の編年では紀元前百年、最近の編年では紀元前二百年から二百五十年に上がります。その時から二〇〇三年の今まで毎年青柴垣（あおふしがき）垣神事を延々と続けています。凄（すご）いというか、すさまじいというか、神社伝承とは偉いものだ。そう感嘆しました。ほんとうに今までの自分が恥ずかしくなりました。

先ほどの阿麻氐留（アマテル）神社の伝承もそうです。今まで、この話は何回もしてきましたが、さらに言わせてもらえば柳田国男・折口信夫という民俗学の大家がおられます。彼らをたいへん尊敬はしていますが、先ほどの小田さんの伝承を書かれていますか。あれだけ各地をまわって伝承を集められた。しかもあれは一人で集められたというよりも、お弟子さんが集められて、さらに孫弟子さんも協力されて、柳田さんが収録された。ですが先ほどの対馬の話、天照が出雲の一の家来である。あの話がなぜないのか。それが新たな疑問だった。

これについて結論から言います。柳田さんは、わたしから見ると二つの弱点があります。一つはセックス。有名な遠野物語がありますが、あそこにはセックスの話はまったくない。それである学者の方が、遠野物語を語った人、名前が出ている人にお聞きになりました。遠野物語には、セックスに関する話はないのですか。遠野物語には、ぜんぜん出てこないですが。答えは、いえいえそんなことはありません。たくさんございます。あれらの話は柳田国男さん

に呼ばれ、お宅に伺って話せと言われてお話しました。ところが、セックスの話を始めると、だまれ！そんなけがらわしい話をするな！聞きたくないと真っ赤な顔で怒鳴りつけられました。それ以後は、そんな話は一切お話しませんでした。

この話信じられますか。自分で現地に行って話を聞く。そうなのかと思っていましたが、人を自分の家に呼びつけておいて話をさせる。そのこと自体が凄い話ですし、セックスの話をいやらしいと言って怒鳴りつけて止めさせる。これもすごい。わたしは柳田さんを尊敬はしていますが、明治人としてそういう面があった。これが一つ。これは学者が書いてあったから知ったことです。

もう一つ書いていないことがある。柳田国男は天皇崇拝主義者です。これは明治人として天皇がすべて根本だ。ですから天皇の威厳に反することには、何を言うか！と排斥した。セックスどころではない。一括して受け付けなかった。小田豊さんは、わたしより年上のお爺さんです。あの話を何回もお爺さんから聞いたと言っておりました。ですから、そのお爺さんの頃ですから、柳田国男やその弟子・孫弟子が、あの話を一切聞いていないとは信じられない。しかしあの話は、完全に『古事記』『日本書紀』に反している。正確に言うと『古事記』『日本書紀』には、良く読めば合っているが、いわゆるわれわれが聞かされた天照大神（アマテラスオオミカミ）は、神の中の最高の神である。その概念には反している。だから柳田国男は、小田さんの話を採用しなかった。証拠と言われれば、この話は聞いたけれでも採用しないよという書き付けでもあれば一番良い。けれども、わたしの推定では柳田国男が聞いていなかったというよりも、柳田国男のイデオロギーにまったく反していた。だから却下された。それも明治人として当然だと言えば言えるでしょうが、わたしの考える学問ではない。

わたしのいう学問とは、天皇家に有利であろうと不利であろうと、事実は事実である。こちらは天皇におべんちゃらをいう必要もないし、特に反天皇の識者にすり寄る必要もない。あくまで事実を事実として、ありのままに捉える。何回考えてもそれしかない。手品はないです。

以上、今述べた重要な話が、柳田・折口両氏に採用されていなかったという意味は非常に深いと思います。

四、「国生み」神話

次に舞台を九州に移します。「国生み神話」というものがございます。

イザナギ・イザナミの神が、「天の沼矛」を天上から海の中に差し入れる。かきまわしてコオロコオロと垂らしたら、まずオノゴロ島ができ、それから大八島が出来た。このような話です。わたしは、これは歴史事実を反映していると考えています。

もちろん神様がいて、この神様が実際に矛を海の中に入れて引き上げる。それ全体が歴史事実である。そんなことは、ありえない。

それでは津田左右吉が戦争中言ったように、まったくのウソ話・作り話。歴史事実とは関係がないのか？津田は七世紀の近畿天皇家の歴史官僚が思いついて、まったく造作したものだ。そういう立場をとりました。「造作（ぞうさく）」という言葉が、津田左右吉が言ったことの学問的な述語のキーワードになっています。それを戦前・戦争中に言ったことはすばらしいですが、それが戦後定説になって教科書を支配するようになった。戦前にはあまり神話を持ち上げすぎて、その反動で戦後は神話はまったくのウソであるという説を持

ち上げたのが戦後の歴史学であり、教科書です。

わたしは、どちらも正しくはない。戦前のように、気が狂ったように天照大神（アマテラスオオミカミ）が天空、スカイ(Sky)から降りてくる。神が日本列島にお遣わしになった。その子孫が、明治天皇睦仁（むつひと）・大正天皇嘉仁（よしひと）・昭和天皇裕仁である。外国の人に話せば、だれにでもバカにされるしかないような話が教科書の先頭を飾っていた。そのような話がインチキであることは当たり前のことです。同時に津田左右吉が言ったように、七世紀の近畿天皇家の歴史官僚が頭で、でっち上げたという話も、わたしにはこれも同じくペケである。

なぜならばその矛（ほこ）と弋（か）。槍の形をした武器が矛、鎌の形をした武器が弋です。その矛と弋で、国を作ったと言っています。ところが矛と弋は実在のもので中国の殷・周・漢あたりで、盛んに使われたものです。弋が早く、矛は遅い。それが朝鮮半島を経由して対馬・壱岐に入ってきた。なによりも筑紫（現地ではチクシと発音する。）では、たくさんの矛や弋の鋳型が出てきている。もちろん矛や弋の実物も、圧倒的にたくさん中心的に筑紫から出てきている。対馬・壱岐も出ますが博多湾岸が中心。ということは矛や弋が出てくる博多湾が中心になって「国生み神話」が作られている。これを大和の七世紀の歴史官僚がどうやって作れるのでしょうか。大和の七世紀の歴史官僚が、筑紫に発掘に行って、矛や弋がいっぱい出てくる。そしてその鋳型がたくさん出てくる。これらを元に、一つ神話を作ってみよう。そのように思うはずがない。しかしながら弥生時代の歴史事実と合致している。わたしは博多湾にある能古島。その島が神話のオノゴロ島のもとになった島であると考えています。そのように弥生時代の筑紫の状況と、あの神話が合致している。つまり、これは歴史事実である。どのような歴史事実か。弥生時代の筑紫を中心に支配していた権力・王権が、この「国生み神話」を作った。そして自分たちが筑紫を支配しているのは、このような神話に基づいている。だから正しい支配だ。そのようなことを言っています。

それで今まで書いた本で言わなかったことを、話をもう半歩進めて言います。こういう神話を、かれらが作らねばならなかったということは、かれらがほんらい博多湾岸の正当な支配者でなかったことを示している。なぜならば、かれらが縄文以来順調に発展して、弥生以後順調に権力者になったならば、何もこのようなあり得ない話を、こういう神話を作って流布する必要はない。このような話を作って流布しなければならないということは、彼らの権力がほんらい正統でなかったことを示している。

この話は、どこから来たのかを話しているとおもしろいですが、今回は立ち入らずに先に進みます。

（『古代に真実を求めて』第六集講演記録参照）

とにかく彼らは正統でない方法で、新しい侵略者として博多湾岸を中心として征服して倭国というものが成立して行く。そういう自分たちの非正統性。正しくない行為。それがあのような神話を作って流布しなければならない理由です。それがわたしの理解である。

同じようなことが、地球上の各地で今もあると思う。たとえばイスラエル。バイブルに基づいて、ここがわたしたちの神聖な土地である。またイスラム教徒はコーランに基づいて、ここはわれわれの神聖な土地である。そのように言っています。これはほんらいの正当な支配者ではなかった証拠である。同じ論理で、そのようになりませんか。わたしは将来この問題を扱いたい。この問題を扱ったらキリスト教とユダヤ教とイスラム教と正面衝突します。ですが、わたしは正面衝突しても勝つと思う。わたしは、ぜんぜんイデオロギー

がない。わたしは、反キリスト教でも、反ユダヤ教でも、反イスラム教でもないから。あくまで人類の歴史を事実として理解する立場です。この方法でとらえる。立ち向かう。向こうのほうは、護るべきものがある。バイブルを護らねばならない。コーランを守らねばならない。それに反するものは許さない。そういう先入観できています。だから勝負したら絶対わたしのほうが勝つ。勝ち負けの問題ではないですが。言い換えると、未来の人類の歴史は、わたしのほうにある。わたしはそれを確信しています。わたしは七十六歳、まもなく死にますから、皆さん是非ともやって下さい。だれが、やっても絶対に勝ちます。このような大事な問題を二・三分で言って申し訳ありませんが。

急いでもとに戻りますが、今述べた国生み神話と国譲り神話は、筑紫（チクシ）の政権が、わたしのいう九州王朝が、自分たちの正統性を、ほんらいは正統でない支配を合理化するために作ったものである。このように考えます。それはわたしのいう九州王朝が発展する話につながります。今は省略します。

今問題になるのはさきほどの「国譲り神話」。つまり神話が言っていることは、出雲から国を譲らせて、博多湾岸を中心として国を築いたと言っているわけです。それはリアルである。弥生の権力が、自己を正当化する必要があって作った話です。そういう神話を作る必要があった。そのことが歴史事実であると言っています。神様が矛を海に突っ込んだことが歴史事実ではない。あのような神話を作らねば、自分たちの権力の支配と維持が出来なかったというのが歴史事実である。そうすると出雲に中心権力があったのを譲らせた。実際は反乱を起こして簒奪（さんだつ）したのですが。それならば前段階に出雲王朝が存在した。それがリアルと考えなければ、わたしの考え方は完成しません。それでわたしは、三十年近くまえに出雲王朝という考え方を、早くから出しました。

ですが、わたしが三十数年前に九州王朝という考え方を出したときは、だれも無視してあまり悪口を言われなかった。ですが出雲王朝と言い出した時、すぐに、もう古田はダメだ。有名な学者が、もう古田の学者としての生命は終わった。そういう声が出始めた。これも直接ではない。新聞記者の方を通じて伝わってきた。新聞記者は、両方の学者にコンタクト出来ますから。

それで九州王朝と言ったときは、まだ矛や弓を中心に博多湾岸から出てきています。それは、だれでも知っている事実である。それを基盤に、弥生時代のあの神話はリアルであると言いました。それに対して、だれも正面から反対することは困難である。賛成する者はだれもいませんが、表では知らない振りをし、内心は反対しにくいと思っていたと思います。

ところが出雲王朝となると、何も根拠はないではないか。出土物が何もないではないか。神話だけあって、まったく出土物がない。だからこそ皇學館大學の学長を務められた田中卓さんが唱えられ、梅原猛さんらが受け継がれた説。つまり『出雲風土記』は作りものである。大和の神話を、出雲に場所を移し代えた、つくりものにすぎない。津田左右吉流に言えば造作である。田中卓さんのアイディアを頂いての梅原猛さんの出世作。そういう状況だった。根拠は神話だけあって出土物が何もないという状況を、もとにして理論化された。そこへわたしが、出雲王朝と言い出した。だから古田はもうダメだ。

ところが状況は、二十数年後荒神谷を初め次々と出てきました。このすさまじいスケールです。出雲以外はどこも立ち打ちできない。今でもまだ足らない、と言っている人がいます。ですが出雲が王朝で足らなければ、他にどの王朝に足るところがあるのか。こう言い

たい。ですから今、出雲王朝という概念を笑える人はいなくなった。ですが古田が言いだした出雲王朝という概念が本当ですと講演でお聞きになったことはないでしょう。内心ではそう思っておられるはずです。ですから出雲王朝という言葉は、あれだけ発掘があれば現在地位を確保したと思っております。今後まだまだ出てくるでしょう。

五、弥生の土笛

さて本日の最後は、今日の本番である弥生の土笛というテーマに入らせていただきます。初めに吹きました弥生の土笛は、発掘されたものではありません。発掘されたものと、そっくりに作りました模造品です。下関などに行けば買うことが出来るかも知れません。

これが最初出てきましたのは山口県下関の綾羅木（あやらぎ）遺跡です。本当におもしろい字地名の遺跡ですが、そこで出てきたとき、たいへん騒がれました。下関で古代史が論じられるときは、たいへん話題になりました。しかしこれが、何を意味するかについては回答がなかった。もちろん、これが何かについては、判明しています。有名な学者である国分直一さんが発表され、中国の文献にあることを証明された。元は中国にあるということが分かっております。陶塤（トウケン　一番簡単な字です）というものが、『周礼』という中国の古典に出てくる。穴が六個あいている。全体が卵形である。厳密に考えれば問題がありますが、大まかには同じである。弥生の口笛が、陶塤である。この国分直一さんの考えは人々が広く承認するところとなった。そういう意味では、陶塤というものの正体は分かった。

しかし、わたしが分かっていないと言いましたのは、この陶塤というものが、歴史の上に置いて、あるいは政治・文学・その他においてどういう意味を、どのような位置づけを持つかは、まだ解明されていないとわたしは考えています。下関で十回ぐらい講演したことはございますが、その度に陶塤について、どう考えておられますかと尋ねられ、まだ勉強中ですと返事したことが、何回かございます。

それで最近になり、やっと分かってきました。まず中国の陶塤の性格を考えてみますと、やはり儀式・儀礼の場の笛である。それも中国の宮廷などの儀礼の場の笛として発達したものである。もちろん、とうぜん最初から宮廷の場ではなく、発達段階においては諸侯だったりするでしょうが。

それで、そのこと自身がたいへんなことを意味します。それは、この弥生の土笛がでてくるところが、日本海岸。それも西の端が福岡県宗像（むなかた）の隣の島の大島。それから下関の綾羅木（あやらぎ）遺跡。特に、鳥取県米子市・島根県松江市からほんとうにたくさん出てきました。綾羅木（あやらぎ）遺跡を追い越した。広島県からも出てきています。これで見ますと弥生の土笛の中心地が出雲であることは疑いがない。東のはしが舞鶴。その近くの京都府峰山町から出てきた。これは弥生中期にまたがるかも知れないという現地の教育委員会の方の見解です。それから東は越（こし）の国。そこから出ないということは意味があるでしょう。そこから東は陶塤を受け付けない。そのような感じです。別の言い方をしますと、出雲王朝の直接の勢力範囲は、東は舞鶴止まりではないか。そういう地理的分布そのものに非常に意味がある。西の端が大島。東の端が舞鶴。中心が圧倒的に米子・松江。つまり、これが圧倒的に出雲が中心であることは疑いない。

もう一つ大事なことは出てくる時期は、圧倒的に弥生前期の二百年間なのです。従来の考古学編年なら紀元前百年。最近の編年は、一〇〇年ないし一五〇年さかのぼりますから、紀元前二百年から二百五十年。それが弥生前期の終わりです。弥生の始まりは以前の考古学編年なら紀元前三百年、今の編年なら紀元前四百年から四百五十年。その弥生前期しか出てこない。舞鶴の一つだけが例外で、他はすべて弥生前期。

だから弥生中期には、まったく出てこない。これは不思議な話ですが、よく分かる話です。なぜ、よく分かるかと言いますと、先ほどの「国譲り」が、弥生前期末・中期初めのところです。これを博多湾岸に目を移して見ると、ひじょうに良く分かる。よく言われる三種の神器、これが弥生中期初めからです。弥生前期には出てこない。新しい矛や弓で権力を樹立した新しい支配権力は、三種の神器の支配権力である。これで見ますと「国譲り」が行われたのは、弥生前期末・中期初めである。

以上、筑紫・出雲の状況を簡単に言いますと、紀元前二百年ぐらいの弥生前期末・中期初めに「国譲り」が行われた。

これも中国の歴史を考えるとおもしろいですよ。秦の始皇帝が登場した時です。中国の情勢と関連はあると思います。

それで紀元前二百年ぐらいに、三種の神器が筑紫に出てきてくる。それ以前は出雲で陶塤が出雲を中心に出ています。陶塤は、中国では宮廷の儀礼の場で使われています。そうしますと「国譲り」以前の出雲のシンボル的な楽器が、陶塤だった。となると陶塤が『古事記』『日本書紀』に出てこないことに意義がある。そうでしょ。これだけ日本列島から陶塤が出てきてる訳ですから、日本列島に存在したことは疑いがない。それなのに『古事記』『日本書紀』には、宮廷の儀式について書きながら陶塤のことはまったく書かれていない。また、出雲のことについて書きながら、陶塤のことはまったく書かれていない。あれだけ出雲のこと、われわれは出雲から王朝を譲られた。そういうことを、ピーアールしながら陶塤のことは書かれていない。これは非常に意味深い。

つまり『古事記』『日本書紀』は、自分たちが敵対した、自分が征服した前の王朝の貴重なものについては、いっさい書かないという立場に立つものである。

世界の歴史の中で、いろいろな国があります。その中で前の王朝のことはいっさい書かないという立場に立つ王朝の歴史書があります。また前の王朝のことについて書いてある歴史書もあります。中国などでは割合前の王朝のことを、後の王朝が書くという風習ができています。その点では、ありがたいですが。しかしながら中国でも全部書いているかというと、そうではありません。横道に入りますが、中国は黄河流域を中心とした歴史としては書いてあります。しかし南は江南、会稽山を中心と揚子江文明は書かれていない。『史記』などには、カボト遺跡などのことはいっさい書かれていない。また西は、西王母などの玉の文明についても、いっさい書かれてはいない。自分たちの黄河流域を中心とした歴史書として書いてあります。自分たちが支配された、その前の王朝についてはいっさい書かれていない。そういう態度を中国の歴史書は取っています。しかし、われわれが知っている『三国志』などの段階については、前の王朝の歴史を、後の王朝が書くということは、大体において成立しています。そういうありがたい状況ですが、しかしヨーロッパなどでも行われていない。

元に戻りまして『古事記』『日本書紀』は、不正直というか、前の王朝について無視する、認めないという立場に立つ歴史書である。これにわたしが力を入れて言っている理由はお分かりでしょう。近畿・東海の銅鐸のことがいっさい書かれていない。近畿で銅鐸がたくさん出てきます。あれほど膨大な量の銅鐸が出てきています。あれほどすごい姿を、明確にもって世に出てきています。しかし『古事記』『日本書紀』には、銅鐸のことはいっさい書かれていない。いっさい無視して書かれています。

あれは知らないのではない。前の文明、前の王朝の貴重な祭祀されたものだから無視する。貴重でないから無視するのではない。言っては失礼ですが、三種の神器よりずっと立派です。三種の神器は、言葉は立派ですが、中身は大したものはない。勾玉は起源は古いものですが、それほど大したものではない。剣は権力者は皆持っている。後は金属器の鏡ですが中国から来ただけです。それを三種類まとめただけです。問題を明らかにするために、あえて三種の神器の悪口を言いますが、銅鐸は三種の神器よりも、もっと立派な国家のシンボルです。三種の神器ごときものでも、国家のシンボルとしてはだれも疑っていない。そうであれば銅鐸が、国家のシンボルでないはずがない。その銅鐸を『古事記』『日本書紀』は、いっさい無視しています。このいっさい無視している意味が大事です。以上の問題が、先ほどの陶塤のことで分かった。つまり銅鐸は、それ以前の王朝の重要な遺物だから無視した。陶塤の問題で論証をともなって、はっきり答えが出てきました。

（陶塤の解説と図表は、ものが語る歴史1『楽器の考古学』同成社山田光洋著などにもございます。）

次に行きます。わたしが思いますのに、陶塤は中国の朝廷の儀礼の場で使われたものです。これは、そのとき詩がともなっていた音楽だけではなくて、肉声の言葉の詩がともなっていたと考えています。

なぜかと言いますと、中国には『詩経』という世界でもひじょうに貴重な古代詩歌集があります。それを見ると韻律を持っている。○○トン、××ツ。リズムを持っています。韻を踏んでいなければ中国では詩とは呼ばれない。

中国の朝廷の儀礼の場で、今は陶塤を例にとって言ってますが、楽器に合わせ詩をうたう。そうすると、のべつまくなし、みさかいなしに声を出すわけではない。リズムに合わせねばならない。

中国人は韻律を踏んでいる。すごいと中国の文学について研究者は言います。それでは北京原人が脚韻を踏んだ詩を歌っていたか。わたしはそんなことはないと思う。北京原人を例に出すなと言われるかもしれんが、獣の叫びのような声を出していたと思う。まかり間違っていても、しっかり韻律を踏んだ中国語を喋っていたとは思えない。それが周代になって明らかに『詩経』に見るような、しっかりと韻律を踏んだものになったのは、儀礼の場で楽器に合わせて詩が歌われる。そのとき、のべつまくなしでは合いません。やはり○○トン、××ツと合っていく。ハーモニーが出るのだろう。それで見事な韻律をもった『詩経』という、世界でもまれな古代詩歌集が成立出来たのは、それには楽器の存在を消すことは出来ないだろう。そのひとつに陶塤があることは明らかです。そういう判断をしました。これが第一段階。

第二段階は、日本で陶塤を真似して、弥生の土笛を作ったことは明らかである。日本の土で作ってはいますが、明らかに陶塤を真似して同じようなものを作ったことは疑いない。その場合も、さきに言ってますが、出雲の朝廷の儀式の場で陶塤を使った。

この出雲朝廷のことは『出雲風土記』では、きちんと書かれてある。ところが国学者たちは、勝手にそれに当たるところを除いて原文を作り替えた。それを岩波古典体系は、本文にしている。この作り替えられた本文を、皆さんが読んでいることになる。下の注を見ると、こういう写本では、このように書かれているが直した。それは間違いである。そのように書かれている。要するに「出雲朝廷」があっては、ぐあいが悪い。（近畿）天皇家以外の朝廷があっては困る。出雲朝廷と理解できるところは、すべて原文の書き換えをおこなっている。『出雲風土記』は各所で書き換えをしています。それについて詳しく書いた論文（『古代は沈黙せず』駿々堂）がありますが、結論から言えばそういうことです。ですから出雲朝廷というものが成立していて、その出雲朝廷のもとに国造というものがあったことは『出雲風土記』に書かれています。

その出雲朝廷でも、同じく儀礼の場があり、その儀礼の音楽に対して、詩が歌われていた。中国に対して、日本だけは音だけ聴いて楽しんでいた。そんなことはないと思う。それが最初は、『詩経』と同じ中国の詩を歌った。日本側が依頼して、中国人に来てもらって弥生の土笛を作って『詩経』を聴いた。しかし、われわれが中国語の『詩経』を聴いても分かりません。やはり日本語の詩が欲しい。当然なのです。そこに五・七・五・七・七が出てきた。

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を
やくもたつ　いづもやへがき　つまごみに
やへがきつくる　そのやへがきを

そのことが『古今和歌集』の序文に書いてあります。これはかなり尊敬する紀貫之の見識。へんな言い方ですが、言っていること全部が当てはまるものではありませんし、すべてを絶賛するのではありませんが、とくに詩に対する分析能力は非常に高いものがある。『古代史の十字路』（ー万葉批判ー東洋書林）で、詳しく論じています。簡単に言いと、彼は五・七・五・七・七のリズムが、今の出雲で成立したのは間違いないだろう。しかし詩は、それ以前からあったのだ。これが紀貫之の見識の凄いところです。つまり五・七・五・七・七のリズムになっていない詩がある。それのほうが古い。それに対して五・七・五・七・七が、新しく成立したものである。それが出雲で成立した。そういう本質的なことを、ピシャッと、とらえています。スサノオが作ったどうかは分からないけれども、出雲で成立したということには意味がある。なぜなら出雲中心で、陶塤が使われたことは明らかである。わたしの仮説では、陶塤で音だけでなく詩が歌われている。その詩は中国語でなく日本語である。その日本語のリズムといえば、やはり五・七・五・七・七である。だから出雲で五・七・五・七・七という定型が成立したという『古今和歌集』の序文の論証は、無視することができない。だから、わたしは紀貫之の説に賛成する。

と言うわけで、だれでも知っている五・七・五・七・七の和歌。その省略形としての俳句。これが成立した淵源が出雲にある。出雲暦だけではありません。その意味で、陶塤は、まさに日本の歴史を明らかにする上で、重要な楽器である。

六、鶴と亀の交わるところ―日本列島

最後にひとつ発見というか、話題になることを紹介して終わりにしたいと思います。

結婚式やお祝いでの席につねに演ずる謡（うたい）に「鶴亀」があります。今まで内心では軽蔑していた。実際に鶴や亀がいないのに、抽象的に歌って喜んでいる。あまり言ったことはないけれども、内心はそう思っていました。こんど、その問題を再検討して、わたしの歴史認識がいかに浅はかであったか。そういうことを七十六歳にしてようやく気が付きました。これも裏付けが必要で、確認しなければなりませんが。

それでこの結論は、日本列島の歴史はどうも一つではない。沿海州からの一つの淵源（えんげん）がある。それも当然で日本列島と言いましても、実際は日本半島だった。今でも冬は樺太（サハリン）のところは、大陸と氷でつながって、歩いて来れます。ですから昔は、太古はもっと地続きです。

そうすると沿海州に、粛慎（しゅくしん）・靺鞨（まつかつ）と呼ばれた人々が居たことは中国の歴史書にも書かれているから、疑う人はいない。そういう人々が、日本半島に遠慮して来なかったということはありません。絶対に来ています。歴史に絶対という言葉を使うことは危ない話ですが、絶対に来ています。ですから日本列島に第一陣として来た人々は粛慎・靺鞨と呼ばれた人々と同質の人である。この話は一番筋の通った話であり、このことは疑っておりません。この問題の裏付けの話もありますが、機会があればお話しいたします。

それだけか。もう一方は太平洋から来た。これは天（海士）族がそうですが、海の民族が来た。そこで交わったところに日本列島が成立し、日本人が成立した。

もちろん朝鮮半島・中国・ハワイなどから、いろいろ人がやってきて、これだけということはありませんが。大きな筋は、やはりアジア大陸沿海州側からの伝播と、太平洋からの伝播。それが交わるところに日本列島の土地も成立し人間も成立している。大まかに言って、それはウソではない。そのように痛感してきました。

それで気が付いてみると、鶴はシベリアから来るのではないか。大陸から来る。日本列島へは、南の鹿児島・宮崎にも来る。日本列島は鶴列島らしい。

亀、これは太平洋側から来る。産卵はご承知の宮崎県から高知県、静岡県までの太平洋側に来る。しかし残念なことにどこから来るか分からない。出てくる場所は不明。それで調べている人にハッパをかけたい。簡単ですよ。調べる装置を亀に付けて人工衛星で調べる。やりませんか。それと関係があるかどうか知りませんが、調べる人が出てきた。アメリカの大学院の学生です。アメリカでは、その大学院生のアイデアにお金を出すスポンサーがついた。それで今言ったように日本列島の亀さんに電波の発信装置を付けた。それを人工衛星で監視する。そうすると、その亀は黒潮に乗って、日本から太平洋を渡ってアメリカ西海岸に行った。そこから先は行方不明になった。それには理由がある。電波をキャッチして位置を測定する人工衛星は、そこまでしかカバーしていなかった。そこから先は不明。それから三・四ヶ月して、亀さんは太平洋マリアナ沖に現れた。

そこから先は、わたしの推定ですが、その亀さんはペルー・エクアドルまで行ったのではないか。海流は、サンフランシスコの沖では止まりませんから。亀さんは自分の力だけで泳いで、サンフランシスコへ行ったのではない。黒潮に乗って、その上で自分で泳いでサンフランシスコへ行った。ですから黒潮はまだ続いている。ここはフンボルト大寒流が北上してきまして、暖流である黒潮とぶつか

る。そして混ざって太平洋を西に流れる。ですからプランクトンなどが大量に発生する。それを求めて魚もたくさん集まる。そうであれば亀さんも、栄養が豊かなこの海域に行ったのではないか。

（これも大事な余計な話をしますが、浦島太郎が亀に乗って行ったのは、南米のペルーでないかと推定しています。質問されれば言いますが。）

いろいろ余計な話もしましたが、鶴が大陸から来ることは間違いありません。同じく亀が太平洋全体から来ることも間違いありません。すると鶴はシベリアから来る霊鳥の代表です。亀は太平洋から来る霊獣の代表です。それが日本列島が接点。あの民謡が、日本の歴史を一言で表しています。そんな重大なことがらを、内心はバカにしていた。人に公然と言わなくてよかった。

しかし、やるべき調査をまだしていない。今考えたところです。民謡大全集などを見て調べていない。鶴と亀の民謡の分布がどうなっているか、今後調べたい。日本列島全部ではないと思います。皆さんの中で、民謡がお得意の人は調べていただけたらありがたい。

日本列島の歴史はどうなっているかと人に聞かれれば、それは鶴と亀の交わるところであると一言で表すことが出来る。

以上、当たるも八卦。当たらぬも八卦の話として聞いていただいてけっこうですが、以上で終わらせていただきます。

（終り）

質問一

一点だけ質問します。対馬の阿麻氐留（アマテル）神社のことですが、先ほどの話では、伊勢神宮の天照大神（アマテラスオオミカミ）と、対馬の天照大神（アマテルオオカミ）とは、同一神と言うことをお話ていただいたのですが、わたしが読んだ本で別の方が書かれたものでは、阿麻氐留神社は男神である。天照大神とは、べつものである。そのように言っていますが。また天照大神を祭っていたのは、元伊勢の丹後のほうから大和の三輪山のふもとに来て、それから現在の伊勢神宮にお移りになったと聞いておりますが。これらをどのように理解したらよいのですが。

（回答）

今の質問にお答えいたします。

対馬の阿麻氐留神社の祭神ですが、性が男神か女神かは、小田さんにしつこくお聞きしました。それで分からないとの返答がありました。ですから分からないというのが正解。男神であるというのは、その本を書かれた人の解釈が書いてあります。しかし神社自身の伝承では、分からないというのが正解。

もう一つこの問題を論じ始めると、おもしろい問題が展開します。縄文時代は女神中心の時代です。完全な証拠としましては、縄文時代の土偶がありますが九十五パーセントぐらいオッパイがある。つまり女性なのです。ということは、女性がひじょうに尊重されていた。女性中心の時代なのです。このもっとも大きな理由は、病気や周辺の動物の襲撃で人が死んでいく時代です。その中で多産というか、子供をたくさん生むということが、人間の繁栄という以上に保存するために必須条件です。それで直接には子供を生む能力をもった女性が尊重されていた。その他にも理由はいろいろ考えられ

ることですが、結論として女神中心の時代です。

ですが阿麻氏留神社の祭神が男神である。それも別にかまわない。弥生時代は男中心の時代に替わりますから。居てもかまわない。それは遅い段階の話ではないか。

天照（あまてる）自身は、わたしにとって、完全に人間です。弥生の前期末、中期初めの人間です。ニニギのおばあさんです。それが女性の首長であった。つまり縄文時代の方法を普遍したというか、そういう立場に立つ、意志は強固で頭脳が明晰な女性である。そのように思っています。

（『古代に真実を求めて』第五集講演記録参照。）

それで阿麻氏留神社自身は、男神を祭っていてもよいが、やはり女神ではないか。このようにわたしは思っています。

もう一つ次の元伊勢神社の問題。これもおもしろい問題です。

京都府舞鶴に籠（この）神社という神社がある。これが元伊勢である。他にも元伊勢を称している神社がありますが、その中心的な存在の神社です。この神社に何回も行きました。本殿・拝殿があって、そこから歩いて二十分ぐらいのところ、山裾のところに奥宮がある。そこに行ってみますと、巨大な岩で、たたみ二・三畳ぐらいの女性の陰部の形をしたみごとな御神体がある。もう一つは、おおきな男性のシンボルもあります。これらが本来の豊受大神。五穀豊穣の神。

五穀豊穣というのは、万物が生い茂る・実るということの弥生的表現です。とうぜん、そのような概念は縄文から、より以上に必要とされた。五穀豊穣のもとは、女性の陰部から人間が生まれる。男女のセックスから生まれる。そういうところから崇拝の対象にした痕跡は、日本列島いたるところにある。

これも一言必要ですが、文部科学省は、このような遺跡の破壊に知らん振りをしている。保護を行おうとしない。三種の神器のような金属器が出てきたら目の色を変えて保護する。今言った、より古い文明の遺物である巨石は保護しようとしない。とくに最近は皆さん車をお持ちですので、ちょっといただいて持ち帰って庭におく。そういう不埒（ふらち）な人物がたくさん居ります。この最近の五十年間は、そのような貴重な文化財が、急速に消滅している五十年間。後世の評価はかならずや、そのような評価がされると思います。

五穀豊穣の神、豊受大神の原点は、女の巨大なシンボル。男のシンボルもありますが、それが縄文時代に渕源であることを知ったわけです。それと天照（アマテラス）を結びつけて、それが伊勢神宮になっていった。

三回目に籠（この）神社に行ったとき、バスに乗り込もうとして気が付いたのが、伊勢の二見浦の二つの岩。あれがそうだ。男女のシンボル。注連縄が張ってある。海上民にとっての本来の神聖なる御神体。多産のシンボル。万物繁栄・豊穣のもとをなす海上の男女神、豊受大神。それを陸上に移したのが内宮外宮。

よく言うのですが今から四十年前、続日本紀研究会が大阪でありました。当時は直木孝次郎、田中卓などが中堅で、わたしはそれに続く若手です。直木孝次郎さんは津田左右吉の流れをくむ人で、田中卓さんは右寄りといわれた人です。このお二人が、もっとも鋭く対立したのが伊勢神宮の起源の問題です。まるで、つかみ掛からんばかりの勢いで口論されていた。そのお二人の話を聞いていて考えたことですが、問題は内宮外宮だ。日本中の神社にぜんぶ内宮外宮があれば良いが、たいてい内宮外宮がない。なぜ伊勢神宮だけ、内宮外宮があるのか。この秘密が解けなければ、伊勢神宮の起源の

論争には参加できない。別に公言したわけではありませんが、一人そのように考えていました。それが解けた。

つまり現在は観光名所の岩、若い人が見向きもしませんが、あの伊勢の二見浦の二つの岩が、男女のシンボル。海上民にとっての本来の神聖なる御神体。海上の男女神。それを陸上に移したから内宮外宮になった。

その男女神について、ここから先は言いにくいが、思い切って言います。豊受大神と言いましても、これは女性の豊受媛（とようら）神と男性の豊受（とようけ）大神と両方います。今はへんなことに外宮のほうに、両方とも突っ込まれている。それで外宮のほうは説明に困っている。われわれが聞くと神主さん自身が説明に困っている。ですが、わたしの今の解釈で理解しますと分かりやすい。ほんらいは内宮のほうが女性の豊受媛神。男性の豊受大神のほうが外宮だった。海上から移した。万物繁栄・豊穣のもとをなす神であり海上の男女神を陸上に移した。そこへ天照が九州王朝・近畿天皇家という形で近畿に連れてこられて、今の伊勢神宮に持って行った。『古事記』『日本書紀』に書かれていますように。そして最終的に伊勢神宮の内宮に、天照大神（アマテラスオオミカミ）は突っ込まれてしまった。内宮に置かれた。なぜ内宮に置かれたかというと、女性の豊受媛神が内宮だった。女性が偉い時代の神だった。それで結局、豊受媛神は旦那さん（？）と一緒に外宮に突っ込まれた。それで外宮のほうは説明に困り、内宮のほうは天照の専売のようになった。それが歴史的な成りゆきである。別に天照（アマテラス）を侮辱するつもりもまったくないし、伊勢神宮を悪くいうつもりもない。わたしにとって、解けずに困っていた元伊勢の由来を明らかにすることが出来た。そういう意味で、籠神社が元伊勢と言っているのはウソではない。たいへん大事な問題を簡単に言いました。

質問二

今日お話をうかがった粛慎（しゅくしん）・靺鞨（まつかつ）が、日本列島にやってきたというお話ですが、それが『風土記』や神話で遡（さかのぼ）れば弥生や縄文である。そのお話を興味深くうかがったのですが。そうしますと、それより古い新石器や旧石器時代との関わり、歴史観というか、歴史のパラダイムをどのように考えておられますか。お聞かせ願いたい。

（回答）

非常に鋭い質問をいただいて、本当にありがとうございます。

現在、私が到達しておりますのは、黒曜石、縄文ですね。以後の問題でございます。旧石器はどうかと言われますと、ホンのチョボチョボと取り組んでいるというか、目見当（めけんとう）ていどというか、そのていどにすぎません。

旧石器に対して、わたしにとって貴重な経験になりましたのは、ソビエト（当時）のハバロフスクの博物館を行ったときです。その時、博物館で見ましたときに、「骨偶」というものがたくさん並んで展示してありました。どんなものかと言いますと、海豹（アザラシ）や海象（セイウチ）の骨に、人間の目や鼻や口を描いています。動物の骨に顔を刻んでいる。またオッパイが、ちゃんと刻んでいる。これを見ましたが一番驚いたのが放射性炭素年代測定です。五万年前とか、二万年前とか、一万五千年前などが、ズラリ並んでいました。これには驚きました。

日本にある東北地方にある土偶。これは有名ですが、とうぜん土器が発明されて以後です。普通の土器の年代で言えば一万二千年以後です。だんだん遡（さかのぼ）っていますが、長野県佐久市の下茂内（しももない）遺跡の土器の二個の破片が一万八千年前（較正値）。それが一番古いでしょう。ですが「骨偶」から言えば、問題ではない。

骨偶は五万年前、二万年前が並んでいる。ですが、これは当然です。土偶というものは、土器という一大工業文明、それが始まって以後でないと土偶が出来ない。土偶で一番古いのは、現在のところ仙台で馬の顔をしてしている土偶が一万一千年ぐらいです。東北歴史資料館に、これを発掘された方が居まして、「これ何に見えますか。」と聞かれ、「馬です。」と答えました。続けてのお話が、「この時代に馬は、いないことになっています。」と言って、困惑されていました。とにかく事実として土偶が一万一千年ぐらいです。較正値でも、一万八千年にはならない。

しかし骨偶は二万年前、はるかに上回る姿を示しています。しかし、これは当然です。アザラシ・セイウチは、土器が発明される以前からいます。しかもこれらの動物は人間にとってたいへんありがたい動物です。巨大ですから肉もたくさんある。うまいかどうか知りませんが。そんなことを言っておられない時代は、貴重な人間の栄養をとる資源だった。しかも、たいへんおとなしい動物らしい。棍棒(こんぼう)をもって人間がそばに寄っても、殴(なぐ)られるまで待っていてくれる。気の毒というか、人間という狡猾な猿にはかなわない。そのように言っていると思いますが。われわれは、いま極地付近というと、食料も何もない索漠(さくばく)とした地帯であると考えます。それは稲作が 発達した時代に生きているからです。ですが何もない時代には、あのような食料の豊富な地帯はない。それで骨は食べることが出来ないから、感謝をして骨を祭っている。ですから博物館で「骨偶」を見た瞬間に、東北の土偶はこの骨偶の伝播であると思いました。そっくりさんです。やはり黒竜江から、当時陸続きで樺太(サハリン)や北海道から東北へ入ってきた人々からの伝播である。それは疑いがたい。とうぜん、それは新石器・旧石器時代である。

それからもう一つ。印象的な話だけで申し訳ありませんが、旧石器に関心を持っていますのは瀬戸内海。

岡山から高松へ渡る橋が、最初に出来ました。ちょうど別の用事で行ったとき、見た教育委員会のパンフレットでは、一万五千年前から二万年前の石器が二万点近く出ていました。この資料を見て驚き、橋が完成した直後に行きました。

行くのには、高松への終着点の一つ手前の坂出、橋のそばにシックでスマートな資料館がありました。そこで館長さんにお会いして、お聞きしました。

「この橋のたもとから、一万五千年前から二万年前の旧石器時代のサヌカイトが、二万点近く出てきたとお聞きしましたが本当ですか。」

館長さんは、「いいえ」と言われました。わたしは、ガッカリした。ガサネタだったか。わたしの絶望した顔を楽しんで、相手の方はゆっくりと言われました。(笑い)

「五十万件ぐらい、あります。おそらく百万件ぐらいには達するでしょう。」

つまり二万点という、ケチな数ではない。

それでは何の為なのか。材料は一〇〇パーセント、サヌカイトです。讃岐の山々がサヌカイトの産地です。

さらに「サヌカイトを、舟でどこかへ運び出したのでしょうか。」とお聞きしました。

館長さんは、おちついて答えていただきました。

「そういう考えもありましたが、それだけではとても、あれだけの膨大な量にはなりません。今の瀬戸内海の海底に、それを使う人々の世界・国があったのだと思います。そこの人が使ったものだと思います。」

昔は瀬戸内海は海でなかった。陸地だった。池や湖ぐらいはあったでしょうが。そこに人々が住んでいた。出てきたサヌカイトは、かれらが使った一部です。あの橋の橋桁（はしげた）のところだけで百万件ですから。その周辺にないはずはない。大阪湾や瀬戸内海の下には、おびただしい数のサヌカイトが存在する。そのごく一部をわれわれが見ているに過ぎない。つまり旧石器の巨大な文明が、瀬戸内海の底に存在した。

これは、もちろん館長さん一人の考えではなくて、アルバイトを含めて頑張っておられた五十人以上いた発掘された方全体の意見です。毎月一度会議を開いて、何年も発掘した結果、そのような考えに落ち着いた。これは非常にリーズナブルな考えです。知らざる旧石器の世界が、この瀬戸内海の海の底に眠っていた。その一端が、橋を架けるとき、かいま見えた。そういう面で、まったくわたしには未知な世界がある。海底潜水艇などで調べていただきたい。イタリアでは行っています。やれないはずがない。これは、いろいろな問題を提起する。

（『古代に真実を求めて』第六集講演記録参照。）

質問三と回答。　今回は略。

1　この中で特定の文字については、文字鏡明朝体 true type を使用させて頂いています。

使用文字　　氏　塡

（文字鏡研究会ライセンス番号 VPKFW-P1049 ）

講演記録『弥生の土笛と出雲王朝』

２００４年　９月　１日　第１刷発行

著　者　古田武彦

編　集　古田史学の会

発行人　横田幸男

東大阪市寺前町２－３－１６

TEL & FAX 06-6727-0408

郵便番号　577-0845

※本書の本文書体は、ヒラギノ明朝体を使用しております。ヒラギノ明朝体で表示出来なかった文字については、文字鏡明朝体 true type を使用しております。